

死・愛・孤独

原民喜

(翻译 李轶伦)

从原子弹爆炸的惨剧中幸存下来之后，我感觉从那时起，我自己和我的文学都被什么力量冲击得好远。我决心无论如何也要把目睹的惨状记录下来。《夏之花》和《来自废墟》等一系列作品中记录的就是那些非同寻常的体验。

我在死亡的呼喊与混乱中，也曾祈求重生。也正是对生的渴望又让瘦弱的我捱过了后来严重的饥馑和穷困。然而，战后，狂澜怒涛却一涌而来，冲击着我的身心，仿佛随时都会粉身碎骨。作品《火之踵》、《灾难之日》写的就是这种感受。

要活下去的每时每刻，仿佛都充满了无穷无尽的战栗。上演于心中的惨剧和苦恼日渐鲜明猛烈，成为我心中最深刻的痛楚。我不知道自己是否能够忍耐这一切，并把它写出来。

我以前常写一些关于死和梦的幻想风格的作品和对幼年时代的回忆录。那时写的东西几乎没有人注意，只有一个人如痴如狂地对我的拙作情有独钟。这个人就是我的妻子。祸不单行，在与妻永别之后不久，便遭遇了广岛的惨剧。在悲惨中支撑着我和我的文学的，只有对爱妻的回忆。我要把这些回忆也写在书中，作为自己的遗物留存下去。

我想，不管今后我的文学作品会有如何的改变，对自己的描写只需这三个词：死、爱、孤独。……两手插在穿了十几年的薄大衣的口袋里，我一个人蹒跚在九段河边的夕阳中。

.....

1945年8月6日上午8点15分，广岛市被投下第一颗原子弹。这是战争史上第一次使用的核武器。据统计，到同年12月为止，当时广岛的推定人口35万人中有14万人以上被这一颗炸弹夺取了生命。

1945年8月9日上午11点02分，长崎市也遭到了原子弹的袭击，长崎市的三分之一化为

焦土。据同年12月末的统计，推定人口24万人中，有7万3884人死于非命。原子弹不仅在一瞬间夺取了如此之多的性命，核辐射造成的原子病也给人们带来了严重的健康损害，之后，还有许多人死在了医院的病床上。并且，至今仍有人不得不过着病魔纠缠的生活。

据核爆死难者名册记载，广岛市的原子弹爆炸的牺牲者有27万5230人（2011年8月6日的统计数字），长崎市的牺牲者有15万5546人（2011年8月9日的统计数字）。原民喜于1905年11月15日出生在广岛市帆町的一个从事缝制业的家庭。他十一岁时丧父，由此受到了很大的打击，造成了极端内向的性格。

原民喜从中学时代开始写诗，1924年入学庆应义塾大学文学部预科，1933年毕业于该大学的英文系，之后开始在《三田文学》（庆应义塾大学文学部主编的知名文学杂志，从该杂志中涌现出众多著名文学家。）上发表短篇小说。

1945年，原民喜在疏散到家乡时遭到原子弹爆炸，虽然得以逃生，后来却长期受到慢性身体不适的困扰。他还从事《三田文学》的编辑工作，除了小说之外，还发表了很多诗和儿童文学。

然而，在身体不适和经济窘迫的情况下写作，使原民喜在精神上受到很大压力，他渐渐厌世，于1951年3月13日在国铁（现在的JR）中央线吉祥寺站和西荻窪车站间的铁路上自杀，结束了自己45岁的一生。



（日本語原文） **死と愛と孤独** 原民喜

原子爆弾の惨劇のなかに生き残った私は、その時から私も、私の文学も、何ものかに激しく弾き出された。この眼で見た生々しい光景こそは死んでも描きとめておきたかった。「夏の花」「^{はじ}廢墟から」など一連の作品で私はあの稀有の体験を記録した。

たしかに私は死の叫喚と混乱のなかから、新しい人間への祈願に燃えた。薄弱なこの私が物凄い饑餓と窮乏に耐え得たのも、一つにはこのためであっただろう。だが、戦後の狂瀾怒濤は轟々とこの身に打ち寄せ、今にも私を粉砕しようとする。「火の踵」「災厄の日」などで私はこのことを扱った。

まさに私にとって、この地上に生きてゆくことは、各瞬間が底知れぬ戦慄に満ち満ちているようだ。それから、日毎、人間の心のなかで行われる惨劇、人間の一人一人に課せられているぎりぎりの苦悩——そういったも

のが、今は烈しく私のなかで疼^{うず}く。それらによく耐え、それらを描いてゆくことが私にできるであろうか。

かつて私は死と夢の念想にとらわれ、幻想風な作品や幼年時代の追憶を描いていた。そのころ私の書くものはほとんど誰からも顧みられなかったのだが、ただ一人、その貧しい作品をまるで狂気の如く熱愛してくれた妻がいた。その後私は妻と死に別れると、やがて広島の惨劇に遭った。うちつづく悲惨のなかで私と私の文学を支えていてくれたのは、あの妻の記憶であったかもしれない。そのことも私は「忘れがたみ」として一冊は書き残したい。

そして私の文学が今後どのように変貌してゆくにしろ、私の自我像に題する言葉は、死と愛と孤独
恐らくこの三つの言葉になるだろう。……十数年も着古した薄いオーバーのポケットに両手を突っ込んで、九段の濠^{ほり}に添う夕暮の路を、私はひとりとぼとぼ歩いている。

初出：「群像」1949（昭和24）年4月号

.....
本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。